

第3回東北復興シンポジウム

[報告] 文責：山口琴子

日 時 2012年3月3日(日) 13:00~16:00
会 場 福島県立博物館 講堂(福島県会津若松市)
参加者 212名
主 催 NPO法人アスクネイチャー・ジャパン、福島県立博物館

(1) 基調講演 「フクシマ」と共に 山折哲雄 宗教学者

一万年もの間災害に見舞われ続けてきた日本列島の歴史と、それゆえに見出される日本の希望、そして、被災地のがれき受け入れ問題が孕む日本人の内面の問題、さらには福島原発行動隊に見られる倫理に対する期待などについて、お話をいただきました。

「3.11後の三陸海岸、地獄をこの目で見たという思いがした。皮肉なことに海山は美しく晴れ渡っていた。日本の自然はかくも残酷なことをするかと思うと同時に、かくも美しい自然であるかと痛切に感じた。恐るべき二面性、あるいは有り難き二面性というのか。」

「がれきの広域処理の問題。昨年の五山の送り火の問題では京都は無様な対応をした。現在京都でも多くの人が嘆き反省しどう乗り越えていったらいいのか考え始めているが、いまだに全国的な規模でがれきを受け入れようとするところは少ない。日本人はいつのまにか地域エゴイズムに染まり尽くしてしまった。あるいは自己愛の罠にはまり込んだ。言葉は厳しいかもしれないが、身勝手な生き残り主義に陥っている気がする。」

「絆と言うことは簡単かもしれない。しかし自らが絆の実現を目指す、これはなかなか難しい。私自身何もできない。行動隊の方々の行動がこの未曾有の事故をてこにして、我々の文明の業を引き受け、乗り越え、新しい技術と新しい倫理の更新のために、もしかするとひとつの大きな役割を果たすのではないかと期待している。」

(2) 基調講演 「福島原発行動隊の道」 山田恭暉 福島原発行動隊理事長

福島第一原子力発電所が直面している「事故処理」の状況と、廃炉への道のりと課題について、豊富な写真や図とともに分かりやすくお話いただきました。また、事故の収束は今後何十年、百年と長期にわたるといふ現実について教えていただきました。

「原発の「事故処理」という仕事は原発の専門家だけでできる仕事ではない。むしろ、原発設備の設計や運転を経験したことよりも、事故処理に関わるさまざまなプロセスや技術を全体として広くとらえる能力が大切である。」

「事故処理最初の仕事は使用済燃料プールから燃料を取り出し、炉内から取り出す燃料デブリのための搬出用容器を入れるスペースをプール内につくること。作業員の被爆は避けられない。ここが一番山場になると思う。」

「福島原発行動隊は今後数十年にわたって世代交代しながら、訴えを続け、現実の事故収束に関わっていく必要があると考える。100年という時間軸の仕事かもしれない。」

第3回東北復興シンポジウム

(3) パネルディスカッション 「フクシマ」と共に

コーディネーター 赤坂憲雄 福島県立博物館館長、学習院大学教授

パネリスト 山折哲雄 宗教学者

山田恭暉 福島原発行動隊理事長

川勝平太 静岡県知事

安田喜憲 国際日本文化研究センター教授

「事故収束の体制」「人の心と自然の関係」「倫理」などをキーワードに、原発事故の厳しい状況の共有、および福島の再出発と新しい文明への期待、またそれはほかでもない東北の人々の心がつくるものであることなどについて議論が交わされました。

「福島原発の事故処理の仕事は少なくとも30年かかる。とても一企業でやりきれないと思えない。東京電力の福島第一安定化センターは独立した機構である必要があるし、スリーマイルでのBechtel社のような総合的な役割を担える会社の存在が大事かもしれない。」

「原子炉の技術屋は、原子炉がどういう構造をしていてどう動くのかというのは知っている、デブリを取り出す機械に詳しいわけではない。技術を統合して作業をマネジメントする技術が必要であり、専門家だけが必要なのではない。」

「802年阿弭流為（アテルイ）の反乱と4年後の会津磐梯山噴火、926年渤海滅亡と6年後の白頭山噴火、1868年戊辰戦争の敗戦と20年後の会津磐梯山大噴火。科学者としては言うてはいけないことだが、人の心と自然は関係があるのではないかと考えている。会津藩の家老、西郷頼母の妻、千恵子さんの歌『なよ竹の風にまかす身ながらも たわまぬ節はありとこそきけ』。この歌には会津の人の魂、折れない節がある。東北人の悲しみが20年後に会津磐梯山を噴火させたのではないか。」

※注：806年の噴火は伝承といわれている。

「東北は明治以降、西日本、関東、東京の餌食となってきた。1キロワットの電気さえ使っていないのに、なぜ東北がこんな被害を受けなくてはならないのか。これまでの文明は美しい大地を踏みにじってきた。皆さんの悲しみは深い。でも、皆さんにお願いしたい。この悲しみが東京直下型地震そして富士山の噴火を起こさないように。どうか許してやってほしい。」

「私は、国が外部の政治的、経済的諸条件によって滅びるというよりは、内部の人間の心が滅びるのだと思う。今の日本は内部から崩壊し始める兆しを見せ始めている。本当の危機だと思う。」

日本は明治以降、近代文明の果実を十分に享受した。内部に抱え込んでいる犠牲は見て見ぬ振りをしてきた。戦後特に犠牲を封印してきたところに民主主義社会のひとつの脆弱性、影のようなものを感じる。東北三県のがれきを日本全国が引き受けようという議論がなかったことが問題。世界の文明崩壊を見ていると大体そこに原因があるのではないかという気がする。」

「今、日本は第3の危機の時代を迎えている。第1は明治維新、第2は第二次世界大戦の敗戦。今は何の危機かという、たわまぬ節その危機だ。最高の生き方というのは他者の命のために生きること。それが最高の幸せであると実感できること。東北にはその心がある。新しい時代は東北がつくと確信をもっている。」

第3回東北復興シンポジウム

◎参加者の感想（アンケートより一部紹介）

- ・新聞・テレビではわからない所まで原発の事を知り、大変ためになりました。
- ・私達は人間以外のすべての命、未来の世代、子供達に、本当に申し訳ないことをしてしまったと思います。でも人間の心のあり方や本当に大事なものは何か、今まであまりメジャーにならなかった声がたくさん出てきています。少しでも日本の方向を変え、新しい価値観、（もともと日本人が持っていた価値観）で生きていけるように、私は福島県人として役に立ちたい。みんな「役に立ちたい」と思っていると思います。
- ・涙が出る程、感動しました。これからの福島復興は人生にも、会津にも、東北にも、日本にも、世界にも、大きな力になると思います。この度のシンポジウムが会津で開催されましたことに感謝致します。
- ・タイトルの「 Fukushima 」について。地元であるならカタカナではなくせめてひらがなでありたいと思う。世界に知られた地名となったけど、愛情こめた言い方として「ふくしま」でありたいと思うがいかがでしょうか。